



ちこの朝のストレッチ
中村アカデミー 各務みちこ
(土岐市駄知町)

多治見支局
〒507-0037
多治見市音羽町4-39
0572(22)3121
Fax(23)5331

恵那通信局
0573(26)2525
Fax(26)5209

中津川通信局
0573(66)1246
Fax(62)0108

可児通信部
0574(62)1501
Fax(61)0270



第六話

白狐ゆかり 2種の樹木

交通量の多い国道19号から二百メートルほど入ったところに、「孝助の嫁」が伝わる

白山神社(土岐市泉中窠町)がある。南の鳥居をくぐって境内に入ると、参道脇には大きく育った杉の木が出迎える。自動車の排気音は次第に小さくなり、独特な静けさを感じながら本殿へと進んだ。

孝助の嫁はハナノキとヒトツバタゴ(ナンジャモンジャ)という二種の樹木が登場する言い伝えだ。これらの自生地は全国的に珍しく、共生する神社の境内はさらに貴重といえる。こうしたことから、一九四三(昭和十八)年に国天然記念物の指定を受けた。

伝承によると、かつて神社の周り一帯は木々がうっそうと生い茂り、昼間でも日光が届かないほど薄暗い森が広がっていたとされる。現在の神社周辺は東に小学校、西にはため池が整備され、当時の雰囲気は全くといって味わえない。

幸直さん(モミ)に聞くと、詳しい内容は分からないとしいた上で「二つの木は今でも神社にとって大事なものです」と教えてくれた。

二種の木は、地域の人々に広く親しまれてきた神社にあって象徴的存在だ。近隣に住む六十代男性は「小さいころは枯れる前のハナノキの前でよく遊んでいた」と思いをはせる。五月上旬に花を咲かせるヒトツバタゴも、雪が積もったような景色見たさに県外からも参拝客が訪れる。

その昔、三輪の森と呼ばれる大きな森の大富池の北に、親孝行で働き者の孝助が住んでいた。早春のある日、池のそばのハナノキの下でキツネが大きなとげを足に刺して苦しんでいた。それを見つけた孝助は手当てをして帰してやった。

翌年の秋、孝助の枕元に美しい娘がやってきて「どうか私を嫁にしてください」と言っていて立っていた。孝助は喜んで嫁にし、二人で病気の母の世話をした。まもなく子どもが生まれることになった。娘は「よいというまで部屋をのぞいてはいけません」と告げたが、孝助は赤ん坊の元気な泣き声に我慢できず、戸の隙間からのぞいた。嫁はキツネの姿に戻り、金の棒を渡して十八年後のハナノキの下での再会を約束して消えてしまった。

子どもはすくすくと育ち再会の日が来た。孝助親子の待つハナノキの下にうらぶれた白狐が現れ「この木を私と思いたい大切にしてください」とナンジャモンジャの苗を贈り去っていった。

孝助の嫁(土岐市)



①白狐が苗を置いて去ったとの伝承が残るヒトツバタゴ
②ハナノキの写真を指し、伝承について語る加藤さん
=いずれも土岐市泉中窠町の白山神社で



(脇阪憲)

中日写協
☆中津川支部8月例会
①伊藤幹朗②千垣内美紀
③垂見敬子